

日露開戦で来日した観戦記者・観戦武官

2025年11月15日

米濱泰英

日清戦争 明治27年、28年（1894、95年）

日露戦争 明治37年、38年（2004、05年）

○ 日清戦争で従軍申請した外国人通信員

イギリス6名、アメリカ6名、フランス3名、ドイツ1名 合計16名

○ 日露戦争で日本軍が示した従軍許可人数

「日本通信員は百人に対して20人、外国通信員は百人に対して15人の割で従軍許可を与えることに決めた」

○ 日清戦争とはどんな戦争

欧米諸国から見た日清戦争：「所詮アジアの野蛮国同士の戦争」

日本国内の見方：福沢諭吉「文野の戦争」

○ 日清戦争後の状況

日本の勝利 三国干渉

清国（中国）に対する評価がガタ落。

「歐米列強に対抗するような軍事力がアジアにはもはや存在しない」

○ 列強の中国侵略

ドイツの膠州湾租借、ロシアの旅順・大連租借、イギリスの威海衛租借、フランスの広州湾租借

○ 北清事変（義和団事件）1900年

義和団「扶清滅洋」。清朝、欧米列強に宣戦布告。イギリス、列国公使館救援に日本軍派遣を要請

◎ 日露戦争

事前の予想：ロシアが圧勝するであろう。国内でも、政治家・軍人は、日本不利、勝目薄い。

アメリカのルーズベルト大統領、日本の勝利を予言。金子堅太郎に語った。

「今度の戦争が始まるやいなや、僕は参謀本部長に言いつけて、日露の軍隊の実況、また海軍兵学校長に言いつけて、日露の軍艦のトン数およびその実況いかんということを、詳細に調べさせて、ロシアの有様、日本の有様をよく承知しとるが、今度の戦は日本が勝つ」

金子は暗号電報で、ルーズベルトの発言を小村外務大臣に打電。

電報を見た日本の内閣各大臣や元老たちが喜んだ

○ 1904年2月6日 国交断絶。2月8日、9日 旅順港、仁川港の露西亜艦隊

に対し、日本海軍の奇襲攻撃。2月10日、双方が宣戦布告。

世界の主要な新聞・雑誌・通信社から、また各国の武官から、従軍許可申請が舞い込む。

○ 観戦武官とは？

成立年代はっきりしない。国家による軍隊が必要、国際法などの制度の成立が不可欠——19世紀半ばころ始まったのではないか（ウィキペディア）

蜷川新：

「彼ら（観戦武官）は軍隊にあらず、また彼らは外交官にあらず、彼らはその属する国の許可を得て、軍に属しつつ軍の占領地域内に在る中立国の一官吏たり。

彼らは故に軍隊としての特権を享有するものにあらず、また外交官としての不可侵権を有するものにもあらざるなり。彼らを不可侵なる国賓の如くに考えるは誤りなり。法理の観念に於いては、外国武官は一中立国官吏に過ぎず。」（蜷川新『黒木軍と戦時国際法』明治38年。蜷川は日露戦争で第一軍（黒木軍）に国際法顧問として従軍）

戦争当事国以外はみな「中立」を宣言。記者も武官もみな中立国から来日。

安岡昭男氏の研究によると、日本が迎えた外国武官は、「13ヶ国、陸海軍計70名以上にのぼる」とある。しかし、正確な数字は分からない。（安岡昭男「日露戦争と外国観戦武官」『政治経済史学』2003年）

外国人記者の従軍申請については、松村正義「日露戦争と外国新聞従軍記者」『外務省

調査月報』2004年、No 2 参照。

観戦武官は、第一次大戦後、自動車、航空機などの輸送手段の発達によって、一か所に留まって観戦することが不可能になり、自然に消滅していった。

○ 宣戦布告以後

2月10日の宣戦布告から5月までの日本軍の軍事行動

○ 旅順口閉塞作戦——旅順港の入口は小さく、中が広くなっている、信玄袋のようなその入口を塞いでしまえば、ロシアの艦船は出入りできなくなる。老朽船を入口に沈める作戦。2月、3月、5月初と3度実行。いずれも失敗。

観戦武官として来日したアルゼンチンのマヌエル・ドメック・ガルシア海軍大佐、戦争終結後日本に2年間滞在して膨大な報告書を執筆。その一部が邦訳されている。(津島勝二訳『日本海海戦：アルゼンチン観戦武官の記録』1998年)

「日本の海軍は全体としてみると、たいへんな成果を上げたが、たった一つだけ失敗した作戦があった。それは「旅順口閉塞作戦」であった」

港の入口までたどり着けた船は1艘もなかった。海軍が使った当時の海図が間違っていた。日露戦終結後、日本の海軍は詳細な調査をして海図を作り直した。従来の海図は港の入口までそうとう手前にずれていた。

○ 観戦記者・武官たちの苛立ち

2月から5月まで3ヶ月を無駄に過ごし、観戦記者や武官に対しては何の説明もない。不満が鬱積する。

ドイツ人医師ベルツ博士の日記。

「観戦のため当地へ派遣してきた外国武官連は、かれらのいわゆる日本内地拘禁にすっかりつむじを曲げている。今や東京には、各国の武官がうようよしている有様だ。かれら自身でも、ばかばかしいことだろう、無為にこんなところへ腰をすえて、しかも戦争に関しては、まったくの話、ヨーロッパにいるよりも知るところが少ないと次第なのだ。」(1904年5月15日『ベルツの日記』下)

記者の中には、荷物をまとめて帰国する者も出はじめた。

ついには大本営の山県有朋参謀総長が満州軍総司令官の大山巖宛てに電報を打ち、「軍の機密に抵触しない範囲内で、彼ら外国通信員に情報を得やすくしてあげるべきではないか」と訓令。

満州で戦争指揮をとっている総参謀長の児玉源太郎は「私の責任だ」と言って辞表を提出。受理されず。

○ 陸戦開始。

5月初旬、陸戦開始。第一軍（黒木為楨指揮）、鴨緑江を渡り九連城を占領。観戦記者15名、観戦武官15名が第一軍に従軍。

大勢の記者・武官はまだ東京で待機していた。

○ 伊藤博文が金子と末松に与えた注意

伊藤博文は広報外交として、アメリカに金子堅太郎を派遣。金子はルーズベルト大統領とハーバード大学で同級生。イギリスへは留学経験の長い伊藤の娘婿末松謙澄を派遣。

伊藤は彼ら2人に、欧米諸国で衰えない「黄禍論」にしっかり対処するよう言いつけた。伊藤は彼らへの手紙で、「黄禍論」とは書かず、「恐黃熱」という語を用いている。

日清戦争後の「三国干渉」は、黄禍論が惹き起こしたもの。

○ 新渡戸稻造『武士道』

各地での戦闘の報道、日本の勝利報道。アメリカの新聞には「武士道」という言葉が出来るようになった。ルーズベルト大統領は、金子に尋ねた。

「日本の武士道ということが頻りに新聞紙上に現れるから、いろいろ本を見たがいかんせん武士道ということを書いた本がない。一体どういうことを武士道といいうのか？ なにか書いた本はないか？」

金子「新渡戸稻造という日本人が、武士道について英文で書いた小さな本がある。これをお送りしよう。」

ルーズベルトはすぐ読んで、すっかり武士道の虜になってしまった。彼はただちにニューヨークに電報を打って、この本を30部取り寄せた。5人の子供がいたが、彼らに1冊づつ与えて言った。

「これを読め、日本の武士道の高尚なる思想は、我々アメリカ人が学ぶべきことだ。お前たちはこの武士道をもって処世の原則とせよ」

残り25部は上下両院の議員や親戚の者などに与えて読むように勧めた。

この話を金子堅太郎は、すぐに外務大臣・小村寿太郎に知らせた。小村はそれを大本営の参謀次長・長岡外史に連絡。大本営では、この本を従軍武官たちに贈るという案が検討され、送ることに決まった。（新渡戸『武士道』は岩波文庫版で本文120頁。2、3時間で読了可能。人に贈るには最適の本であった）

この話が観戦武官のイギリスのハミルトン中将『思ひ出の日露戦争』（松本泰訳、昭和10年）に載っている。

「8月19日の日記

「東京から新渡戸稻造博士の著書『武士道』とビール1本が届いた。これは第一軍付武官一同に配給されたのである。」

8月21日の日記

「私はビールを飲みながら、『武士道』を読んだ。」

私は日本人が非常に謙遜で、いかなる場合でも人前で誇るようなことをしないのを、いつも感嘆していたが、この書物を読んで初めて、日本人が素晴らしい自尊心を持っているために、それが謙遜に見えるのだということが分かった。戦争に勝って誇らないのも、勝つのが当然だと心得ているからである。」

新渡戸『武士道』は、第一軍だけではなく、第二軍、第三軍の外国人武官全員に送られたにちがいない。

○ マッカーサー、乃木旧居を訪問、ハナミズキを植樹

武士道に感銘を受けた父子がいた。子供は日本占領の立役者ダグラス・マッカーサー、父はアメリカ陸軍少将のアーサー・マッカーサー。父は観戦武官として第三軍（乃木軍）に配属。

第三軍は旅順の要塞を奪い取る任務を負う。要塞は堅固で3度の攻撃も失敗。最後に203高地で激烈な戦闘が行われ、日本軍が高地を占拠した。1905年正月元旦、ロシア軍から使者が来て、要塞を日本軍に明け渡すと言明。ロシア軍の將軍ステッセルは乃木に面会したいと希望。乃木は快く応諾。

乃木は勝者・敗者の区別を一切取り払い、対等に会見する意思を表明。この姿勢が叡聞に達し、直ちに明治天皇による聖旨が総参謀長山県有朋より乃木に届けられる。聖旨は、「ステッセル將軍が祖国のため尽せる苦節を嘉し玉ひ、武士の名誉を保たしむべきことを望ませらるる」

まだ戦争が終結していない時点で、明治天皇が敵軍の將軍を称える声明を発表するのは異例のこと。天皇が乃木の武士道に共鳴して発せられた勅語と言えよう。

乃木はステッセルと会って、別れ際に、「戦場にそのままになっている戦死者を、時間がかかるが、自分は埋葬しなおそうと思っている。それについて希望があれば承りたい」と言うと、ステッセルは驚いて、「そこまで考えてくださっているのか？ 特に希望とてないが、できればロシア人共同墓地に埋葬していただければありがたい」と。乃木は3年かけてその約束を果たし、同時に「旅順陣没露兵將卒之碑」なる白大理石の大きな忠魂碑を建立した。1908年6月10日、碑の除幕式が行われた。

（これについては、『20世紀メディアよもやま話』（2020年）の拙稿「日本が建設したロシア兵の忠魂碑」参照）

ステッセル將軍に対する乃木の対応は、第三軍に従軍した観戦武官たちに、くわしく伝えられたはずである。乃木軍に従軍したアーサー・マッカーサーは「これぞ日本の武士道だ」と感銘を受ける。遅れてやって来た息子のダグラスに、「武士道の具現者たる乃木希典のような軍人になれ」と諭した。

ダグラスは『回想記』で、明治の將軍たちにはみな会ったという。

「私は大山、黒木、乃木、東郷など日本の偉大な司令官たち、あの鉄のように強靭な性格と不動の信念をもった、表情のきびしい、無口な、近づき難い男たちに、ぜんぶ会った。」

1945年8月、日本占領に乗り込んできたダグラス・マッカーサーは乃木邸を訪問、アメリカハナミズキの木を植樹して行った。

空襲により、乃木神社は焼失。乃木邸と廄舎は焼け残った。乃木邸のハナミズキには木の札が立っていて、それには「終戦後マッカーサー将軍が植樹したアメリカハナミズキの樹」と書かれている。(乃木邸は、毎年乃木の自刃した9月13日に一般開放される。今年は特別に12日と13日が開放された)

* * * *

日本の武士道に感銘を受けた外国人武官はかなりいたようである。日本軍も意識的にそれを宣伝した形跡がある。これは結果的には、伊藤博文らが心配した「黄禍論」(恐黄熱)を防ぐのに最も有効な役割を果たしたのではなかろうか。